『堂ヶ谷戸遺跡XII』共和開発株式会社　2020.3　中村耕作執筆箇所　p134-139

2. 堂ヶ谷戸遺跡出土の土偶装飾・抽象文付土器

世田谷区堂ヶ谷戸遺跡第 61 次調査 4 号土坑から土偶装飾と抽象文が付された土器が出土した。立体的・抽象的な装飾の多い縄文土器の中でも中期前葉の勝坂式土器はその極致であり、土偶やヘビ・イノシシなどの具象的な動物装飾も少なくない。本例もその一つに位置づけられるが、モチーフ、モチーフの組み合わせ、出土した遺跡の位置や遺構の種類などに特筆すべき点がみられる。本稿ではその特徴について検討し、本例の持つ重要性を確認しておきたい。

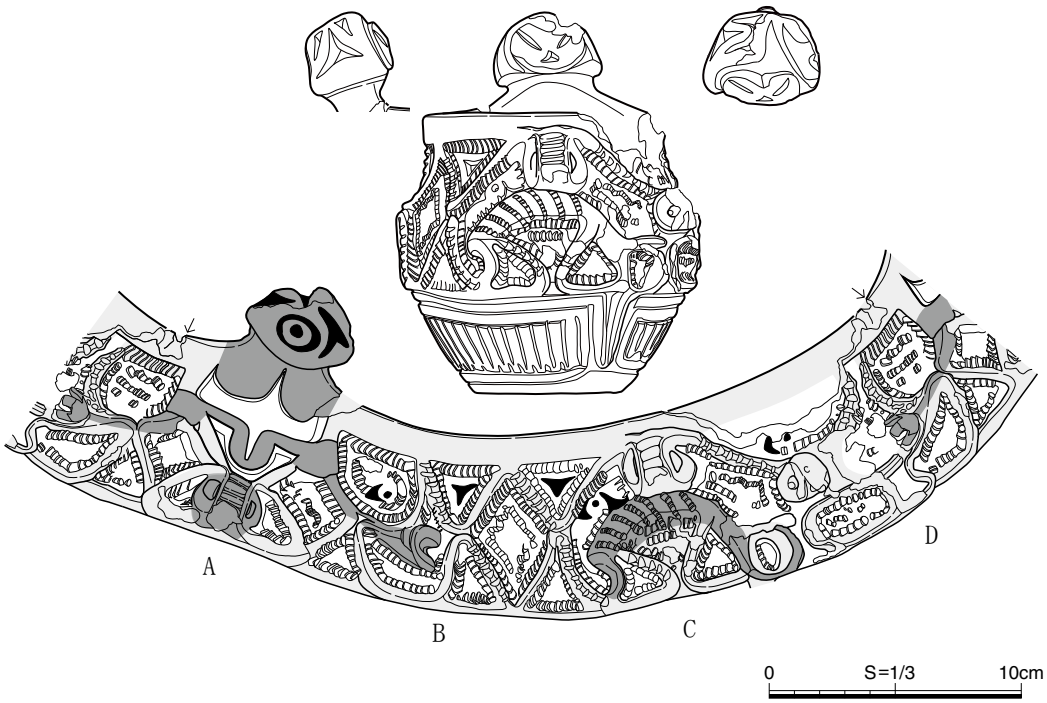
1．器形・施文手法と編年的位置

本例は顔面装飾を含めて高さ 15.4cm というやや小形の土器で、胴下半部に最大径をもつ鉢形を呈する。口縁部直下の無文帯、最大径部分に３本・底部直上に２本の横走する隆帯で２つの施文域が画されている。実測図に従い、土偶装飾部をＡ面、抽象文部をＣ面とし、その間をＢ面･Ｄ面と呼称する［第 89 図］。

胴上半部の施文域はさらに上下２段に分割され、三角形状の隆帯が組み合うことによって三角形区画と菱形区画が表現される（Ｄ面は区画は明瞭ではない）。三角形区画の頂点同士が接する箇所は、盛り上がるように粘土紐を貼り付けている。隆帯の内側にはやや幅広の角押文が施される。さらにその内部に幅狭の角押文による区画または波状文などが施される。また、隆帯の上に刻みが施される箇所があり、上段では三角形の左側、下段では右側が原則のようである。

胴下半部には、上に長い切り込み、下に短い切り込みが連続して施文される。施文域を画する２～３本の横走隆帯とともに北陸の新崎式の蓮華文に由来するものと考えられるが[1]、新崎式では口縁部に付される文様であり、切り込みの長短も上下逆である。なお、抽象文頭部の直下部分のみ、上からの隆帯と下からの深い抉り込みで区切られている。

勝坂式土器は一般に施文手法によって狢沢式→新道式→藤内式→井戸尻式に編年細別されており、これらの手法の特徴から新道式２段階（今福 2008、新地平編年 6b 期:中山 2016）に位置づけられる。



第 89 図　堂ヶ谷戸遺跡出土の土偶装飾・抽象文付土器

２．抽象文

上述の胴上半部の基本モチーフに加えて、土偶装飾と抽象文が対向する面に付されている。抽象文は、下向きの三日月状の胴部に円やＣ字状の頭部を持つ定型化したモチーフだが、モデルが不明であり、一般に抽象文・サンショウウオ文・みずち文などと呼ばれている[2]。勝坂式前半期には比較的一般的なモチーフで数段階の変遷が明らかとなっている。すなわち、狢沢式期の懸垂文から派生、新道式期に定型化し、当初は粘土板を貼った立体的なものだったものが、藤内式期には隆帯で胴部を縁取ったもの、さらに１本の隆帯のみで胴部を表現するものなどに変化していき、井戸尻式期には続かない（三上 1986、釈迦堂遺跡博物館 2001、今福 2019）。

本例は無文帯に置かれた「懸垂鈎」（小野 2010）が双環突起（眼橋状突起）である点、胴部が立体的な点、胴部には幅狭の角押文が縦方向に施される点など古い様相を示している。類例として狢沢式期の山梨県高畑遺跡例［第 90 図 1］、新道式期の長野県大石遺跡例［第 90 図 2・3］、町田市御嶽堂遺跡例［第 90 図 4］を挙げておく。右側の反り返る部分が尾部と考えられるので、頭部は左側ということになる。明瞭な頭部表現はないが、小野正文（2010）のいう「ＣＶ面」のうち、Ｃ字状の一部が表現されたものと考えられる。藤内式期には鰭状の垂下文を伴うものが多いが、本例には付されない。

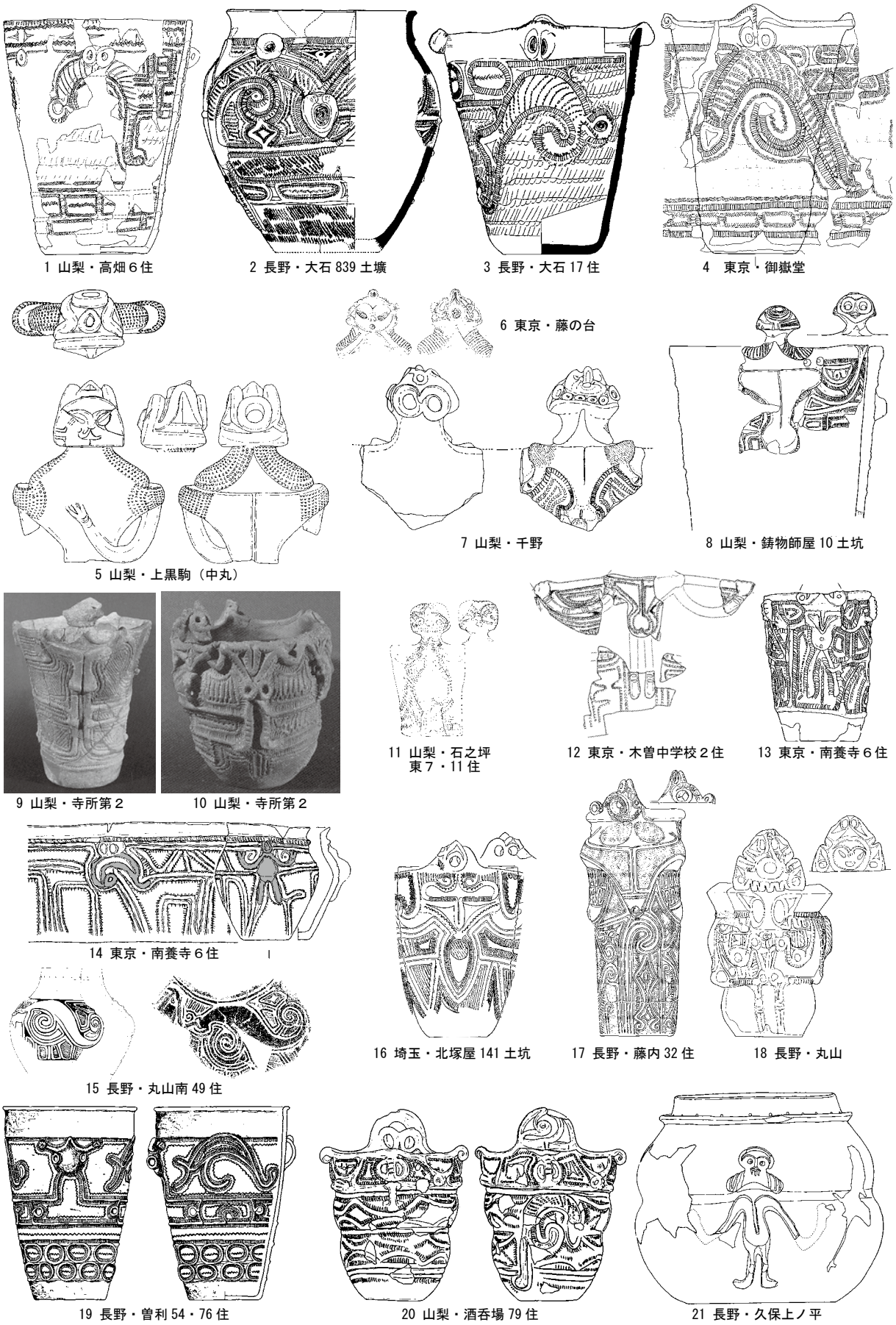
３．土偶装飾

抽象文の反対側に付された土偶装飾は、頭部を口縁部上に配するもので、この部分を指して顔面把手とも呼ばれるが、ここでは藤内式～井戸尻式に定型化した胴部モチーフを持たない一群と区別して頭部～胴部全体を土偶装飾と呼ぶ[3]。

頭部正面観は下向きの半月形、側面観は台形で、顔面としてハート形の粘土板を張り付けている。鼻を中心に丸みを帯びている。両目は釣り目で細く深く掘り込み、鼻と口は三叉状にした後にそれぞれ深く彫り込んでいる（鼻孔表現は１か所のみ）。後頭部は中央とその脇を彫り込んで円文を浮き彫りにし、右側面・左側面および額から頭頂部に向けてそれぞれ三角形に彫り込んで、全体として玉抱き三叉文を形づくっている。両側面の三角形の形状は非対称である。こうした顔面・頭部は、従来の土偶編年では狢沢式期～新道式期に位置づけられてきた（今福 1998、櫛原 1998、山崎 1998）。ハート形の顔面は国宝縄文のビーナスの一群に由来する古い特徴である一方、後頭部の玉抱き三叉文や半月形の正面観などは新道式期に登場した新しい要素である。しかしながら、新道式期～藤内式期の土偶装飾付土器の顔面部は、双環突起（小野正文（2010）の「双環面」、永瀬史人（2009）の「双環把手」）が多く［第 90 図 7･8･16 など］、半人半獣表現と解釈されている（永瀬 2009）。土偶の顔に類似する例は、町田市藤の台遺跡［第 90 図 6］にもみられるが、頭部～肩部の破片であり、胴部とともに遺存する本例は希少な事例である。

口縁部直下に配される胴体部分は、背上半部を彫り込むことで両肩を浮き出たせて強調している（「うなじ文」：櫛原 2000）。頭部形態と合わせて著名な山梨県上黒駒（中丸）遺跡出土の土偶［同 5］を想起させるが、「うなじ文」は上黒駒以外の土偶には類例はなく、むしろ狢沢式期～藤内式期の土偶装飾付土器に一般的な造形であり［第 90 図 6 ～ 13･16･17］（谷口 1998、櫛原 2000）、中山真治（2015）が「黒駒型土偶装飾付土器」として類型化している。両肩に文様を施す例が多いが、本例には見られない。彫り込まれた背中部分の下には上端が左右に伸びたＵ字状の隆帯装飾が位置する。直接の類例として、長野県久保上ノ平遺跡の有孔鍔付土器胴部に付された「ひ」状のモチーフ［第 90 図 21］が挙げられるが、山梨県寺所第２遺跡例［第 90 図 10］、埼玉県北塚屋遺跡例［第 90 図 16］、国立市南養寺遺跡例［第 90 図 13］を仲立ちとすることで、この切り込みが上黒駒土偶や山梨県千野遺跡例［第 90 図 7］、同鋳物師屋遺跡［同 8］、町田市木曽中学校例［第 90 図 12］などの土偶装飾付土器の背中に施された垂線（「背筋文」）に由来するものと考えられる。

これらの類例ではこの部分から両側に腕が伸びている。本例では腕は不明瞭だが重三角区画をたどっていくと、左側には３本指文、右側にはＣ字状文（２本指文）が見出せるので、これらが一体となって土偶



S=1:8（17・18 は S=1:12
15・19 は S=1:16　9・10 は縮尺不同）

第 90 図　土偶装飾・抽象文土器の関連資料

装飾を形成しているものと理解できる。

背部の下には抽象文の懸垂鈎と同様の双環突起が置かれており、脚部は省略されている。新道式期の土偶装飾付土器の類例は脚部部分が欠損しているので当該期の状況は不明だが、藤内式前半期の山梨県石之坪遺跡例［第 90 図 11］や同諏訪原遺跡例には脚部があり、藤内式後半期になって長野県藤内遺跡例［第 90 図 17］や北塚屋例などのように器体と融合するものと考えてきたが（中村 2013）、本例のように脚部を表現せずに双環突起を置く例は別途検討する必要がある。狢沢式期の山梨県寺所第 2 遺跡例［第 90 図 10］や、井戸尻式期の長野県丸山遺跡例［第 90 図 18］は臀部部分が双環突起となり、そこから両脚が垂下しているので、本例もそうした類例で、脚部が省略された可能性がある。

土偶装飾付土器は東京都に加え、埼玉県でも見られるものの、両都県ともに、頭部をもたないもの、頭部破片のみのもの、顔面が抽象化（双環突起化）した段階のものなどが多い（富士見市立水子貝塚資料館 2010）。中部高地を含めても新道式期の事例は少なく、脚部が省略されているものの顔面と胴部が遺存する例として本例の重要性は高い。

4．抽象文と土偶装飾の組み合わせ

抽象文は多くの場合、深鉢に 2 体が対になって配置されることが多い。土偶装飾は全周する例がそもそも少ないので配置は不明瞭だが、他の土偶装飾や動物装飾とセットで配置されることが多いようである。

今福利恵（2019）は土器に対になって配置される動物の組み合わせを検討し、勝坂式前半期には抽象文（「抽象ヘビ文」）とカエル文（しばしば人体文とも呼ばれる）、後半期にはカエル文とイノシシ文、イノシシ文とヘビ文がそれぞれ対峙されると整理した。今福は、顔面把手についても、「擬人化」として動物との融合の可能性を指摘している。

抽象文とカエル文の対峙例には、長野県曽利遺跡［第 90 図 19］でのカエル・抽象文それぞれ交互に計 4 体が配置されるもの、長野県丸山南遺跡［第 90 図 15］でカエルの手を抽象文が喰らうもの（全体は不明）、国立市南養寺遺跡［第 90 図 14］で頭部のないカエル文と抽象文が反対側で対峙する例［第 90 図 11］があるが、いずれも胴部に配されている。本例と関係するのは口縁部上に配された顔面装飾との組み合わせであるが、数は少ない。狢沢式期の山梨県石原田北例は外向きの「双環面」（内側は環面）を頭部とし胴部・脚部を持つカエル文の両側面胴部に抽象文が配される。山梨県酒呑場遺跡［第 90 図 20］には新道式期の内向きの「双環面」の下に双環突起を挟んで抽象文が配された例がある。このように抽象文が胴部装飾と組み合うのは 1 例のみ、口縁部上の顔面と組み合うのも 2 例のみで、いずれも「双環面」である。勝坂式後半期には顔面把手とヘビ文が対峙する例が知られており、胴部のヘビ文として長野県榎垣外遺跡例が想起されるが類例は少ない。

前述のように、土偶装飾付土器の顔面部に「双環面」が多く、半獣半人と解釈されている（永瀬 2009）。これに対し、本例は、土偶そのものと、動物装飾である抽象文が対置している。小杉康（2007）は、前期後半以降、井戸尻式期の顔面把手付土器が定型化するまでの過程に、人体表現と動物表現が様々なヴァリアント（異本）を生成しながら展開してきたことを論じているが、類例の少ない本例の構成も、そうしたヴァリアントの 1 つとして位置づけることができよう。

5．土坑からの出土と遺存状況

器形やモチーフがある程度判明する抽象文土器や土偶装飾付土器は竪穴住居覆土もしくは遺構外から出土することは多い中で、本例は土坑覆土中ほどからの出土である。抽象文土器は数が限られているにもかかわらず 1 遺跡あるいは 1 軒で複数個が出土することがしばしばみられる。

土偶装飾付土器の土坑内での出土例としては山梨県鋳物師屋遺跡 10 号土坑例［第 90 図 8］がある。環状集落内側に位置し、坑底中央に扁平礫が置かれ、土器はその上部で検出されているが、上部が削平されていて確認面での出土のため欠損部分が多く、本来的な埋納状況は不明である。抽象文土器はいく

つかの例がある。このうち新道式期には以下の３例が報告されている。山梨県唐松遺跡 49 号土坑は多数の土器片、土偶破片５点、石器 18 点を伴うが、同遺跡では狢沢式期～藤内式期の住居跡は確認されておらず土坑の性格も不明である。長野県大石遺跡土壙 839［第 90 図 2］は、他の土坑とともに環状集落中央部に位置し、その一部が墓坑と想定されているものの、本例の覆土や出土状況の詳細は不明である。同村では比丘尼原遺跡でも環状集落中央の土坑群の一角から土器が出土した例があり、掘り込みは確認できなかったが周囲同様の小竪穴であったと推定された（小竪穴 1002）。以上のように、３例が環状集落の内側に位置するというほかは、土坑個々の遺存状況や堆積状況が不明瞭である。堂ヶ谷戸遺跡の当該期の遺構分布も未詳であり、本土坑の位置づけは今後の課題である。

本例は、Ｄ面の口縁部付近に欠損が見られるほかはほぼ完形であるが、出土時には土偶装飾部分のみ、割れて器体内から出土している。意図的な破損かどうかは判断できないが、東京都・埼玉県で顔面部分のみが出土する例や、逆に顔面部を欠損する例が多い中では、珍しい例である。

Ｄ面の欠損部周辺からＡ面にかけての器表面、土偶装飾の顔面～頭頂部は、大きく荒れており、被熱によるものと考えられる。Ａ面～Ｄ面内側の器表面も痘痕状に荒れている［写真図版ａ・ｂ］。こうした土坑内出土の勝坂式土器の強い二次的な被熱については中山真治が府中市本宿町遺跡の事例に注意しており[4]、今後の検討で類例が増加する可能性がある。

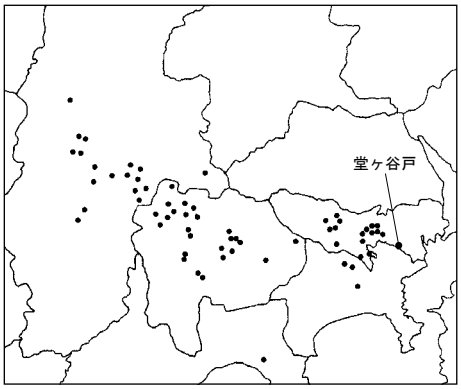
写真図版ａ　Ｄ面：外面

写真図版ｂ　Ａ～Ｄ面：内面

６．阿玉台・勝坂文化の接点での出土の意義

第 91 図は釈迦堂遺跡博物館（2001）原図による抽象文土器の分布図である。分布域は東京都・神奈川県・山梨県・長野県の中南信と静岡県に１例であり、群馬県や千葉県まで広がる勝坂式分布圏の中では限られた範囲である。東京都内では武蔵野台地中部（調布市・三鷹市）までであったが、本例の発見は若干ながら東限を更新することとなる[5]。

東京都内での抽象文土器出土の中心は八王子市を中心とした多摩地域であり、武蔵野台地の中～西部でも大規模集落にはそれぞれ数例の出土がある。これらの地域では狢沢式～新道式期の集落や同時期から継続する大規模集落も少なくない。このうち、土偶装飾付土器の出土遺跡として、国立市南養寺遺跡、町田市木曽中学校遺跡、同藤の台遺跡がある（但し、藤の台遺跡では周囲に同時期の住居跡は検出されていない）。新道式期の抽象文土器も、南養寺遺跡を除くと、羽村市・八王子市・町田市といった東京都西部域に集中している。これに対して、武蔵野台地東部では狢沢式～新道式期の集落は限定的であり、藤内式期以降に大規模集落が営まれる（小林 2012）。



第 91 図　抽象文土器の分布
（釈迦堂遺跡博物館 2001 を改変）

堂ヶ谷戸遺跡ではこれまで多数の住居跡が確認されているが、新道式期では本調査区から離れた遺跡北東の第 32 次調査 155 号住居の 1 軒のみであり、出土土器の主体は阿玉台Ⅰｂ式である。武蔵野台地西部～中部の遺跡では勝坂式（狢沢式～新道式）が多数を占めるのに対し、堂ヶ谷戸遺跡を含む東部では阿玉台式（Ⅰａ式～Ⅱ式）が凌駕し、次の段階で勝坂式（藤内式）が逆転を果たす遺跡が多い（津村ほか 2002、小林 2003）。こうした中で勝坂式の精神文化の象徴ともいえる土偶装飾・抽象文を施す本例が新道式期に持ち込まれたことは大きな意味があったはずである。

本例の観察と執筆の機会をいただいた世田谷区教育委員会、共和開発株式会社、教示を得た中山真治、今福利恵、金子直行、佐賀桃子の各氏にお礼申し上げます。

第 90 図出典（各図とも適宜改変）
1：山梨文化財研究所編 2005『高畑遺跡』山梨市文化財調査報告書第 8 集／ 2・3：長野県教育委員会編『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書　昭和 50 年度　茅野市・原村その 1　富士見町その 2』／ 4：玉川大学教育博物館編 2017『御嶽堂遺跡発掘調査報告書』／ 5：土偶とその情報研究会 1996『土偶シンポジウム 4 長野大会　中部高地をとりまく中期の土偶』／ 6：藤の台遺跡調査団編 1980『藤の台遺跡Ⅱ』／ 7：中村日出男・小野正文「みみずく把手に関する一考察」『月刊考古学ジャーナル』109 ／ 8：櫛形町教育委員会編 1994『鋳物師屋遺跡』／ 9・10：山梨県立考古博物館 2004『縄文の女神－人面装飾付土器の世界－』／ 11：石之坪遺跡発掘調査会編 2000『石之坪遺跡 (東地区)』／ 12：木曽中学校用地内遺跡調査団編 1983『町田市木曽中学校遺跡』／ 13・14：国立市遺跡調査団編 1985『南養寺遺跡Ⅱ』国立市文化財調査報告第 19 集／ 15：駒ケ根市教育委員会編 1977『丸山南遺跡』発掘調査報告第 6 集・国立歴史民俗博物館編 1996『企画展示　動物とのつきあい』／ 16：埼玉県埋蔵文化財調査事業団編 1985『北塚屋Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 48 集／ 17：富士見町教育委員会編 1981『藤内』／ 18：箕輪町教育委員会編 1990『丸山遺跡』／ 19：富士見町教育委員会編 2001『曽利』／ 20：山梨県埋蔵文化財センター 編 2004『酒呑場遺跡（第 1 ～ 3 次）遺物編－図版編』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 216 ／ 21：南箕輪村教育委員会 1997『久保上ノ平遺跡』

---

[1] 金子直行の教示による。
[2] この文様の呼称・モデルについての諸説は先行研究を参照（小野 2010、末木 2010 など）。近年の研究者の多くはヘビと解釈しており、今福利恵（2019）が「抽象ヘビ文」の呼称を提示している。
[3] 口縁部上に頭部～胴部の土偶状モチーフを配する一群は大日野原型土偶装飾付土器（中山 2015）として区別されている。これらの関係性については別途検討する必要がある。人面・人体文と呼ばれることもあるが、動物との融合が指摘されているものも多いので避けたい。また、有孔鍔付土器に多くみられる器体胴部に全身像が付される一群も一応別扱いとしておく。
[4] 中山真治の教示による。『新府中市史　資料編 1 』186 頁にカラー写真が提示されている。
[5] 神奈川県では下末吉台地（横浜市高山遺跡、前高山遺跡、八幡山遺跡、受地だいやま遺跡など）、埼玉県では武蔵野・入間台地（ふじみ野市西ノ原遺跡、江川南遺跡、飯能市加能里遺跡、落合上ノ台遺跡、坂戸市中小坂遺跡など）、長野県では下伊那（飯田市川路大明神原遺跡）に例があり、分布範囲は更新されるが、集成未了のため分布域の問題は今後の課題である。本稿執筆にあたり都内は重点的に再集成を行ったが 23 区内からの明瞭な個体は確認できていない。

※本データは印刷前データであり、その後ページ数が変更となっている。
また、タイトルの前に「附編」が付された。

【引用・参考文献】

安藤更生　1955 「東京都世田谷区岡本町遺跡」『日本考古学年棒』３

今福利恵　1998 「中部高地の縄文中期前半における土偶の基礎的把握」『土偶研究の地平２』勉誠社

今福利恵　2008 「勝坂式土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション

今福利恵　2019 「勝坂式土器における動物文様と人体表現」『山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター研究紀要』35

江坂輝弥　1928 「東京市世田谷区石器時代遺物発見地名表」『貝塚』第６号

小野正文　2010 「物語性文様について２」『山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター研究紀要』26

神奈川考古同人会　1980 『縄文時代中期後半の問題　土器資料集成図集』神奈川考古第 10 号

共和開発株式会社　2019 『堂ヶ谷戸遺跡Ｘ』

櫛原功一　1998 「山梨県の縄文時代中期土偶－有脚立像土偶の出現をめぐって－」『土偶研究の地平２』勉誠社

櫛原功一　2000 「「土偶装飾付土器」について」『土偶研究の地平４』勉誠社

黒尾和久・小林謙一・中山真治　1995 「多摩丘陵・武蔵野台地を中心とした縄文時代中期の時期設定」『シンポジュウム　縄文中期集落研究の新地平　発表要旨・資料』

黒尾和久・小林謙一・中山真治　2004 「１. 多摩丘陵・武蔵野台地を中心とした縄文時代中期の時期設定（補）」『シンポジュウム　縄文中期集落研究の新地平３―勝坂から曽利へ―　発表要旨』

小杉　康　2007 「物語性文様－縄文中期の人獣土器論－」『縄文時代の考古学 11　心と信仰』同成社

小林謙一　2003 「多摩・武蔵野台地縄紋中期集落の文化要素－土器群組成比と炉形態の基礎的分析－」『セツルメント研究』４号

小林謙一　2012 「縄文時代中期集落（東京都内）データベースについて」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 172 集

小林達雄編　1989 『縄文土器大観』　株式会社小学館

小林達雄編　2008 『総覧縄文土器』総覧縄文土器刊行委員会

釈迦堂遺跡博物館（猪俣喜彦）　2001 『抽象文土器の世界』

末木　健　2010 「縄文中期の抽象文土器」『山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター研究紀要』26

世田谷区史編さん室　1975 『世田谷区史料』第８集　考古編

世田谷区教育委員会　1982 『堂ヶ谷戸遺跡Ⅰ』

〃　1982 『堂ヶ谷戸遺跡Ⅱ』

〃　1982 『堂ヶ谷戸遺跡Ⅱ』

〃　1988 『堂ヶ谷戸遺跡Ⅲ』

〃　1996 『堂ヶ谷戸遺跡Ⅳ』

〃　2001 『堂ヶ谷戸遺跡Ⅴ』

〃　2008 『堂ヶ谷戸遺跡Ⅶ』

〃　2013 『堂ヶ谷戸遺跡Ⅷ』

〃　2014 『堂ヶ谷戸遺跡Ⅸ』

〃　2014 『鶴ケ久保遺跡Ⅱ』

谷口康浩　1998 「土偶型式の系統と土器様式」『土偶研究の地平２』勉誠社

玉口時雄　1953 「世田谷区岡本に於ける土師式住居址調査概報」『金鈴』３

津村宏臣・小林謙一・建石徹・坂口隆・西本豊弘　2002 「縄文集落の生態論（3-1）－考古学的文化要素の傾向面分析－」『動物考古学』第 19 号

東京帝国大学　1928 『日本石器時代遺物発見地名表５版』

永瀬史人　2009 「顔面装飾としての環状把手の系譜－相模原市当麻亀ノ甲遺跡・西原遺跡出土の縄文土器を例に－」『扶桑　田村晃一先生喜寿記念論文集』
中村耕作　2013 『縄文土器の儀礼利用と象徴操作』アム・プロモーション
中山真治　2015 「顔面把手付土器小考２」－勝坂式の土偶装飾付土器と顔面装飾の付く土器について－『東京考古』33
中山真治　2016 「勝坂式－勝坂式の編年と細分－」『シンポジウム縄文研究の地平 2016 －新地平編年の再構築－発表要旨』縄文研究の地平グループ・セツルメント研究会
比田井克仁　1999 『文化財の保護　特集弥生時代の東京』 東京都教育委員会
比田井克仁　2001 『関東における古墳出現期の変革』 雄山閣
富士見市立水子貝塚資料館（和田晋治） 2010 『平成 21 年度企画展　縄文土器と動物装飾』
福田健司　2008 『南武蔵の考古学』
三上徹也　1986 「中部・関東地方における縄文時代中期中葉の土器の変遷と後葉土器への移行」『長野県考古学会誌』51
三上徹也　2018 「縄文時代中期・顔面様装飾把手の変遷から水煙把手への変質と背景」『日本考古学』 日本考古学協会
武蔵文化財研究所　　2008 『堂ヶ谷戸遺跡Ⅵ（改訂版）』
〃　　2019 『堂ヶ谷戸遺跡Ⅺ』
山崎和巳　1998 「関東西南部の中期初頭・前葉の土偶－五領ケ台様式期～勝坂様式期の様相－」『土偶研究の地平２』勉誠社
吉本洋子・渡辺　誠　1999 「人面・土偶装飾付深鉢形土器の基礎研究（追補）」『日本考古学』 日本考古学協会
和田　哲　1975 『西上遺跡―縄文中期文化の研究―』 昭島市教育委員会